

規模拡大に伴い多様化するコメの品種構成

主任研究員 小針美和

1 上位10品種の作付シェアが低下

2017年産のうるち米の品種別作付動向をみると、作付面積上位10品種の占めるシェアは74.8%で04年の79.6%から5ポイント弱低下した((公社)米穀機構調査)。各産地での新たなブランド戦略や、外食・中食等の業務用需要の増加に対応した多収性品種の開発・普及の動きが進むなかで、作付品種は徐々に多様化しているとみられ、その背景には、稲作の生産構造と大規模稲作農業者の作付形態の変化が関係していると考えられる。

そこで、平野部を中心に担い手への農地集積と規模拡大が進む、JAぎふの米穀出荷者データの集計結果および同JA管内の農業法人の事例をもとに、その動向を検証する。

2 担い手を中心に作付品種の多様化が進む

まず、JAぎふでの品種別の集荷割合の変化をみる。同JAでは、担い手農業者の経営安定化に向けて、12年産から実需者とJAとの直接契約にもとづいた業務用米(あさひの夢〔多収

性中生〕、みつひかり〔多収性晩生〕等)の非共計販売や、飼料用米等の水田活用米穀の積極的な受入れを行っている。その結果、これらの多収性品種や飼料用米専用品種(知事特認による品種を含む)の集荷が増加し、その割合は取組み前(11年産)の12%から17年産では26%へと大きく上昇している。一方で、従来の地域の推奨品種である「ハツシモ」の割合は、11年産では72%であったが、17年産では64%に低下している。

第1表は、JAぎふの協力を得て、規模階層ごとの作付品種数別の経営体数構成比をみたものである。1品種のみ作付けしている経営体の割合は、1ha未満では95.1%とほとんどが1品種のみであるが、作付規模が大きくなるほどその割合は小さくなり、30ha以上ではゼロとなる。2～5品種を作付けしている経営体の割合は、30ha未満までは上昇するが、30ha以上になると低下する。50ha以上ではその過半が6品種以上を作付けしており、経営面積が大きいほど作付品種数も多い状況が確認できる。

第1表 JAぎふの作付規模別にみた米穀出荷者の作付品種数別構成比

		階層ごとの作付品種数別構成比			(単位 %)	
		1品種	2～5品種	6品種以上	全出荷者数に占めるシェア	全作付面積に占めるシェア
作付規模別	1ha未満	95.1	4.9	0.0	95.5	48.3
	1～5ha	69.0	31.0	0.0	3.5	11.3
	5～15ha	30.2	62.8	7.0	0.6	9.0
	15～30ha	11.1	83.3	5.6	0.2	10.2
	30～50ha	—	62.5	37.5	0.1	7.3
	50ha以上	—	42.9	57.1	0.1	14.0

資料 JAぎふ提供資料
 (注) JAぎふ管内の18年産米出荷契約データ(米穀出荷者数7,259経営体、作付面積3,971ha)を加工。

3 適期作業に不可欠な作期分散

稲作は播種・田植えの春作業と秋の収穫時期に作業が集中する。また、生産物の質および量の確保には、適期作業が重要となる。

1ha未満の経営体はほぼ全てが第2種兼業農家で、生産量に占める自家消費の割合も高い。そのため、栽培体系が確立され作りやすく、食べ慣れている地域の奨励品種を1種類作付

けることが多い。また、田植えや収穫も1日あれば作業できるので、奨励品種の適期中の土日各農家で作業するのが一般的である。

しかし、機械1台の稼働能力は限られるため、一定以上の経営面積になると1種類のみでは適期内での作業が困難となり、異なる品種を組み合わせて作業時期を分散させる必要がある。

4 品種構成のキーは販売戦略と作期分散

—アグリード株式会社の事例—

第2表はJAぎふ管内の農業生産法人アグリード株式会社の作付面積の変化と品種数、収穫作業時期をみたものである。同社のコメの作付面積は10年産では40ha程度であったが、リタイアした地域内の小規模農家の農地を引き受ける形で経営面積を拡大しており、18年産では89ha(うち主食用米54ha)となっている。10年産、15年産、18年産を比較すると、規模拡大とともに品種数が増え、作業期間も長くなっていることが確認できる。

同社では、作付計画の策定にあたって、販売計画と品種ごとの作業適期を考慮し、規模拡大してもコンバイン1台で収穫が可能になるよう品種選択している(第3表)。

また、食味を問わない飼料用米を組み込むことで、主食用米の収穫には条件が悪い日にもコンバインを稼働させつつ、天候や乾燥状態に応じて主食用米の収穫のタイミングを調整できるよう工夫している。

さらに、18年産では、実需と結びついた生産販売の一層の強化を図り、中生品種の増産にあたって実需者、卸売業者、JAぎふの連携による試験栽培に同社が実証ほ場として参画し、多収性中生の新品種「にじのきらめき」の栽培も開始している。

その結果、18年産の作付品種数は全体で15

第2表 アグリード株式会社の経営面積と作付品種数、収穫作業時期

(単位 品種、ha)

	10年産	15	18(計画)
品種数	8	11	15
経営面積	60	82	121
コメ作付面積	40	72	89
主食用米面積	40	40	54
収穫開始	9月25日	9月5日	8月23日
収穫終了	10月23日	11月15日	12月2日
作業期間	28日間	70日間	100日間

資料 アグリード株式会社提供資料

第3表 アグリード株式会社の主な主食用向け作付品種(2018年産)

(単位 ha)

品種	作付面積	収穫時期の目安
あきたこまち	3.3	8/20~8/25
コシヒカリ	6.7	8月末~9/10
にじのきらめき	0.6	8月末~9/10
とよめき	0.5	8月末~9/10
ミルクQueen	3.0	9/15~9/25
あさひの夢	4.8	9月末~10/5
ハツシモ	23.8	10/7~10/30
みつひかり	5.9	11/1~11/30

資料 第2表と同じ

品種となっており、10年産では7割であった生産量に占めるハツシモの割合は、18年産ではコメ全体の2割、主食用米に限っても4割強に低下している。

5 求められる稲作経営の高度化

地域の推奨品種を作付けしていた小規模高齢農家がリタイアし、その農地の担い手への集積と作期分散が進んでいけば、今後、品種構成の多様化はさらに進展するであろう。

ただし、品種数が増えるほど、コンタミ(異品種の混入)防止をはじめとした緻密な作業管理や多様な品種に対応できる乾燥調製施設の整備も必要となる。規模拡大に応じた、稲作経営の質の高度化がますます重要となろう。

(こばり みわ)